

「日本銀行」と私たちの暮らし

～ お金と金融の働きを学ぶ～

『「日本銀行」と私たちの暮らし』は、須田美矢子審議委員が、2005年夏に中学生を対象として、日本銀行で行った授業の内容を編集した指導用教材です。全体は、「お金」「モノの値段」「銀行の役割」の3つのパートに分かれています。

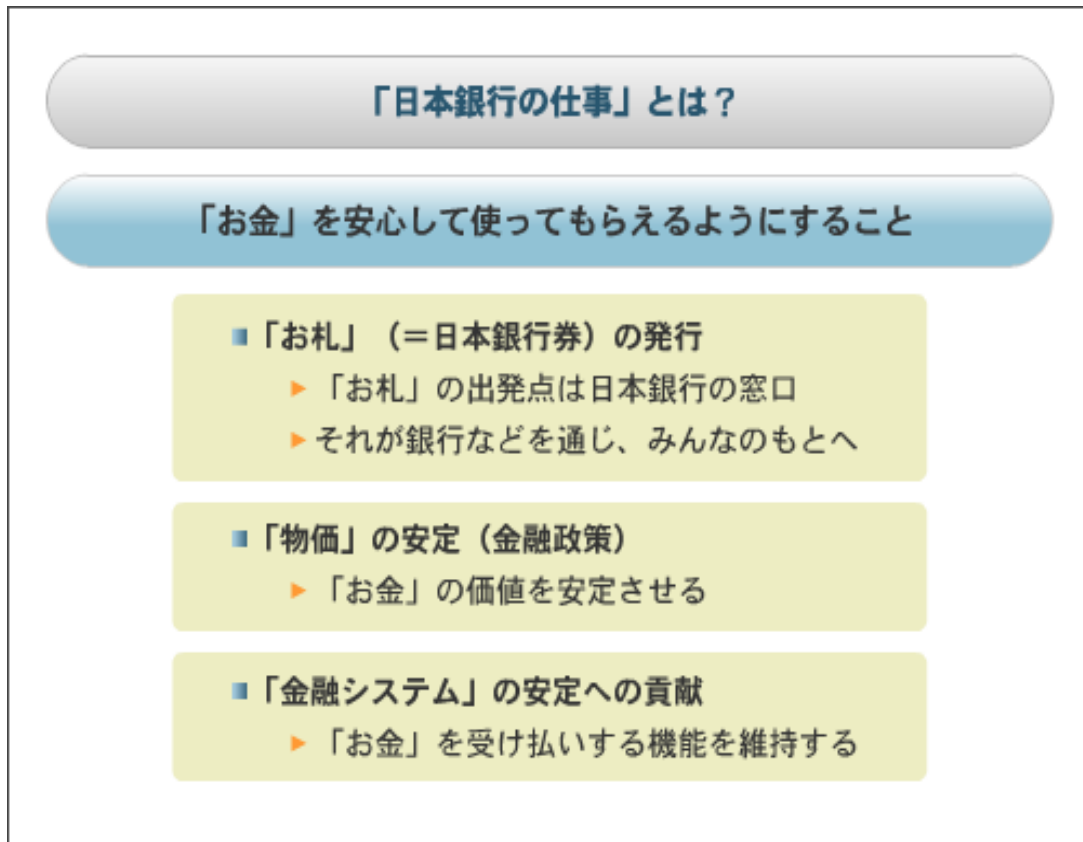
お金 ▶
ムービー数 15

お金(お札、硬貨)の機能を始め、日本銀行によるお札の発行、お金の流通経路や偽造防止技術を知ること、身近なお金について学びます。

「お金」 目次

- 1.「日本銀行の仕事」とは？
- 2.「政策委員会」とは？
- 3.「お金」は何のためにあるの？
- 4.「お金」になれるものは何？
- 5.「お金」がその役割を果たすために
- 6.「お金」を信じる？ 信じない？
- 7.「お金」の価値を守るために
- 8.「お札」の一生
- 9.「お札」を守るために
- 10.「にせ札」の増加
- 11.「にせ札」が増えるとどうして困るの？
- 12.「にせ札」作りをめぐる環境変化
- 13.「出来心の偽造」
- 14.「にせ札」を作ったり、使ったりするとどうなるの？
- 15.「お金」はどのように動いているのか？

1.「日本銀行の仕事」とは？



日本銀行はどのような仕事をしているのでしょうか。

日本銀行の仕事は、大きく分けて三つあります。

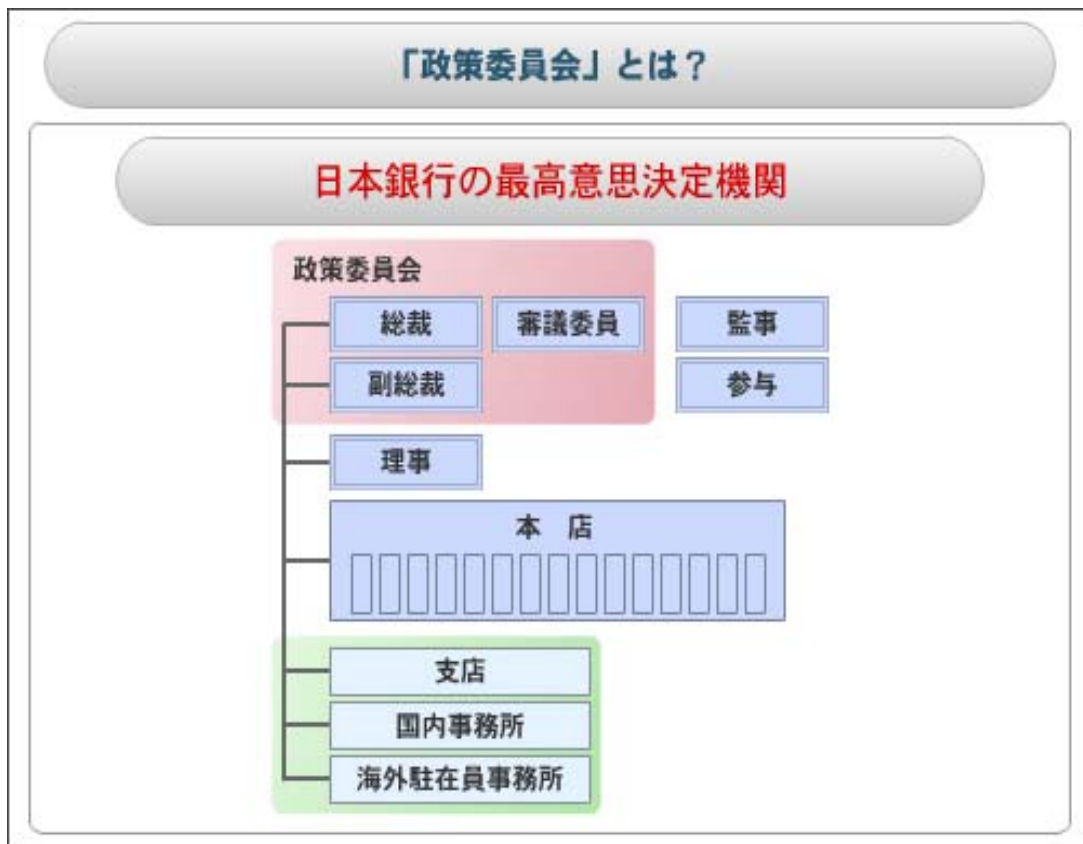
まず一つめの大事な仕事は、お札を発行することです。みなさんが持っているお札には、日本銀行券と書いてあります。お札は、毎年日本銀行が印刷する枚数を決め、国立印刷局で印刷し、日本銀行の窓口から世の中に送り出されているのです。これは、ふつうの銀行と大きく違う日本銀行の役割です。

二つめは、お金の価値を安定させることです。昨日は千円で2個買えたのに、今日は1個しか買えなくなっていた、としたらどうでしょう。それはお金の価値が半分に下がってしまったということです。そうならないように、物価を安定させる方法を考えて実行することを金融政策といいます。この金融政策も日本銀行の仕事です。

三つめは、人々が金融機関を通して、お金を受け取ったり支払ったりするしくみと関係しています。このしくみを決済システムといいます。また、金融機関を通してお金が血液のように私たちの暮らしに流れるしくみのことを金融システムといいます。日本銀行は、決済システムや金融システムがきちんと機能するために、重要な役割を果たしています。

このように日本銀行は、みんなが安心して「お金」を使えるようにするという、大切な仕事をしています。

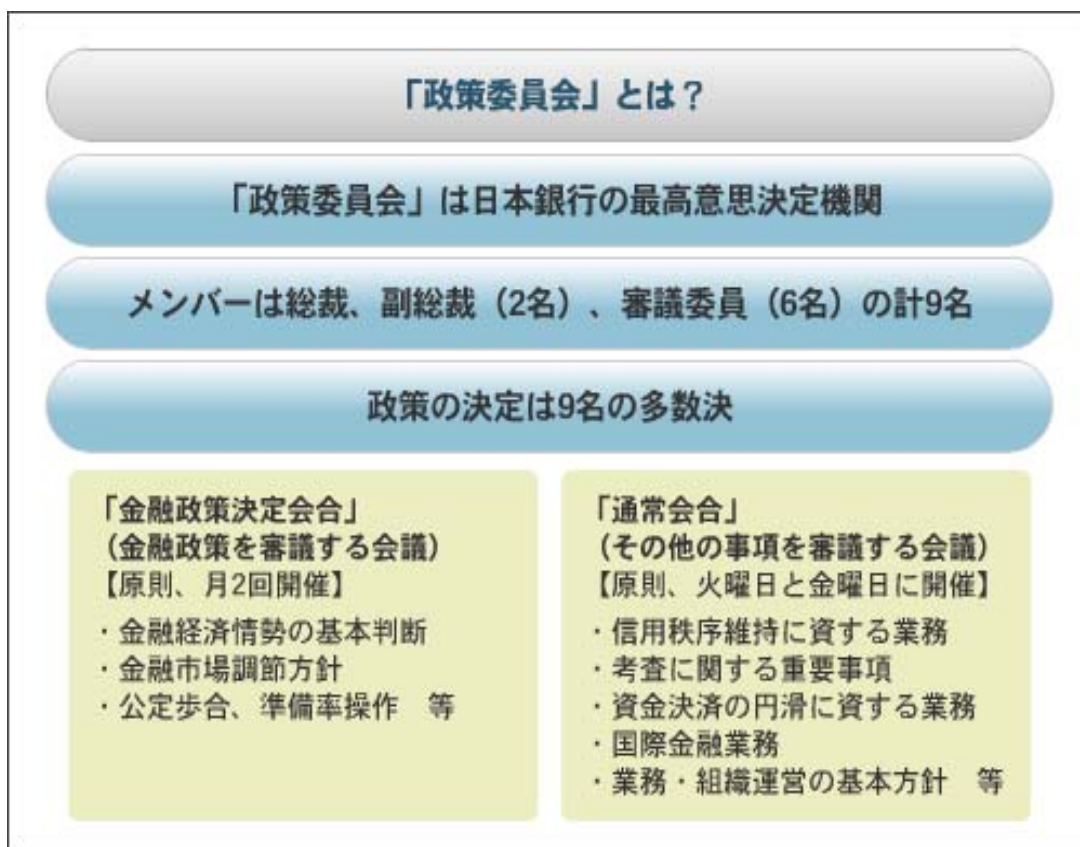
2.「政策委員会」とは？



日本銀行は、わが国の中央銀行として、さまざまな部署が連携して仕事をしています。本店のほかに、支店や国内・海外事務所もあります。日本銀行で、政策や業務について最終的に決めるのが「政策委員会」です。

日本銀行の最高意思決定機関である「政策委員会」は、総裁と副総裁2名、それに6名の審議委員の計9名のメンバーで構成されます。9名は国会の衆議院・参議院の同意を得て、内閣が任命します。総裁や副総裁、審議委員に任命されるのは、経済または金融について高い見識をもった専門家や学識経験者などです。任命は内閣によってなされますが、政策の決定は9名の多数決によって「政策委員会」が独立して行います。

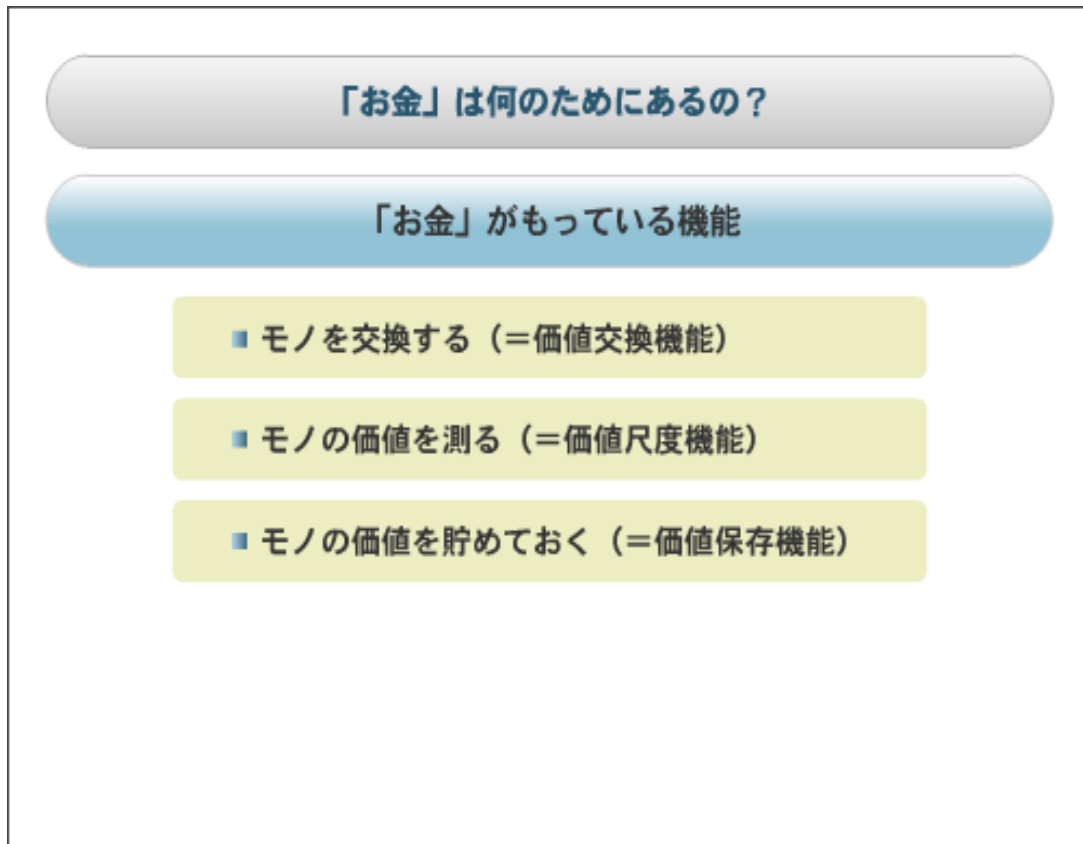
2.「政策委員会」とは？



「政策委員会」では、金融政策について話し合う会議を原則として月2回開催し、経済情勢を判断しながら金融政策の方針を決定します。ほかに週に2回、金融政策以外の日本銀行の業務について話し合っています。

政策委員会のメンバーは、日本銀行の中だけでなく、いろいろな人たちとの意見交換のために日本国内のほか海外にも出かけたりします。

3.「お金」は何のためにあるの？



お金はいったい何のためにあるのでしょうか。お金がなかったらどうなるかを例に考えてみましょう。

もしお金がなければ、みなさんは欲しいものをどうやって手に入れますか。物と物とを交換するという方法が考えられます。あなたは果物を食べたいので使っていないパソコンと交換したい、と思ったとしましょう。

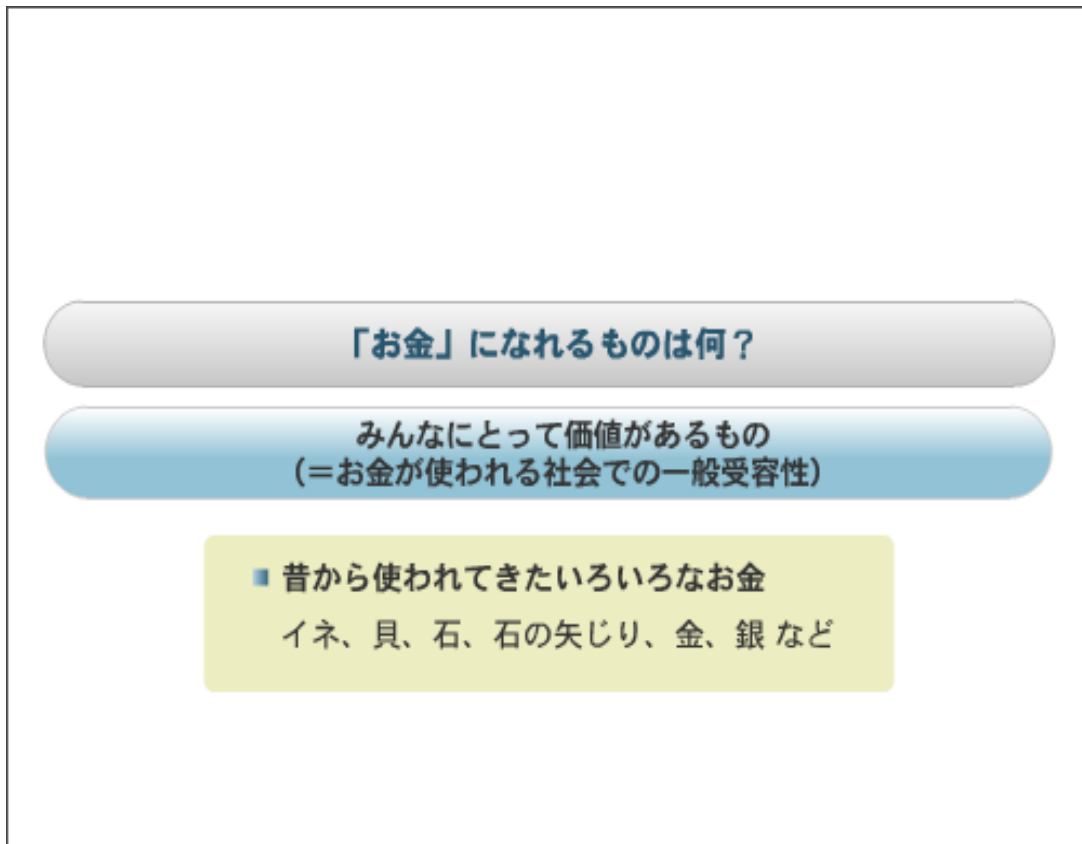
まずは、果物を持っているけれど、いまは食べたくないでパソコンと交換したい、と考えている人を探さなければなりません。そのような人を見つけるのは簡単でしょうか。仮に見つかったとして、では、いったいパソコン1台はどのくらいの量の果物になるのでしょうか。

さらには、いまパソコンと果物を交換しても、あなたが果物を食べるのは1週間後だとしたらどうでしょう。果物は1週間後には腐っているかもしれません。

「お金」があれば、パソコンを売ってお金にして果物を買うことができます。これを価値交換機能といいます。また、お金があれば、モノの価値がどのくらいになるのかを測る物差しになります。お金という物差しでパソコンと果物に値段をつければ、交換する場合の交換比率がわかります。これを価値尺度機能といいます。そして、お金があれば、いまパソコンを売り、1週間後に果物を買うこともできます。これを価値保存機能といいます。

このように、「お金」には、モノを交換する価値交換機能、モノの価値を測る価値尺度機能、モノの価値を貯めておく価値保存機能があります。

4.「お金」になれるものは何？



お金は、私たちの生活になくてはならないものです。世界中の人々は、大昔からこの価値に気づき、お金によって経済のしくみを組み立て、社会をつくってきました。

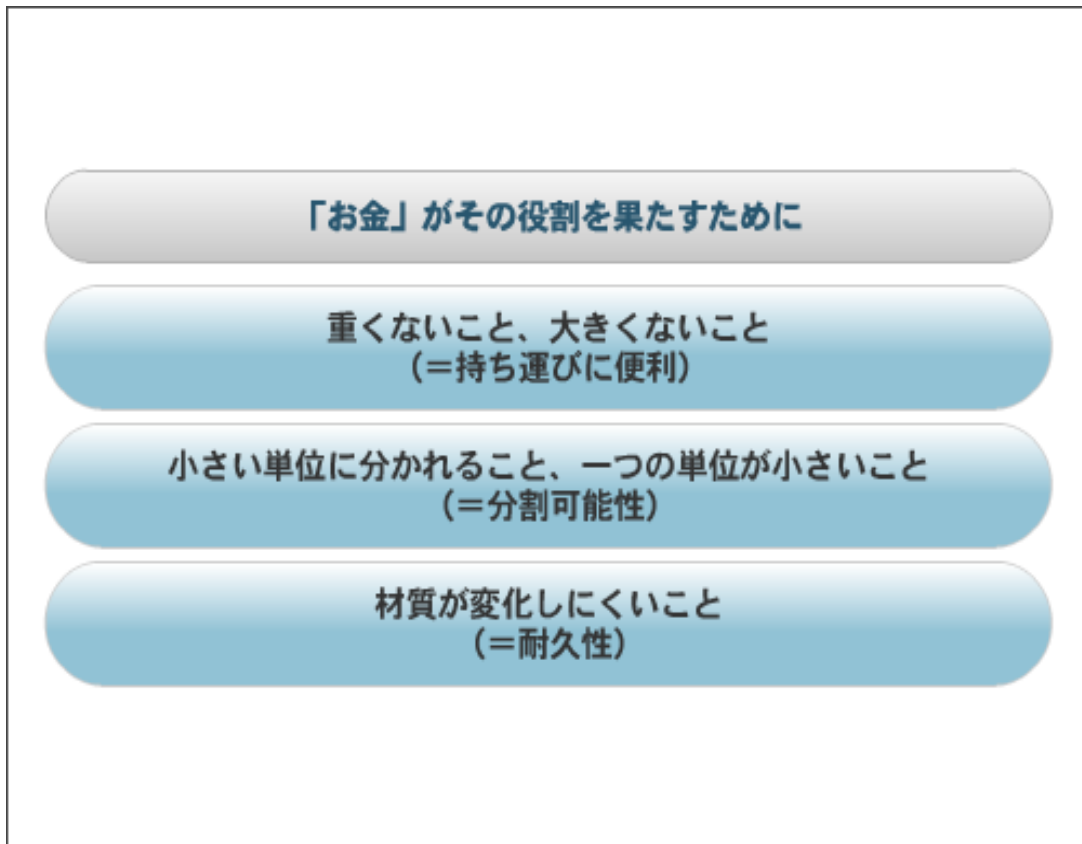
お札のなかった時代は、お金そのものが価値のあるもので作られていました。例えば、大昔にはイネ、石の矢じり、貝や石、もう少し時代が経つと金や銀など、誰もが大事なものと認めるものが「お金」として使われていたのです。

では、お札はどうでしょうか。お札そのものはただの紙ですから、金や銀のような価値はありません。でも、千円や5千円、1万円と額面どおりの価値があると認められています。それはなぜでしょうか。

それは、みんなが「お札には価値がある」と信じているからです。つまり、お札は使われている社会のすべての人が価値を認め、信頼しているから、「お金」として通用するのです。信頼がなければ、お札はただの紙切れに過ぎません。

国際社会では、自分の国の中だけでなく外国からも信頼される必要があります。日本銀行が行っている、みんなが安心してお金を使えるようにするという仕事は、日本のお金への信頼を世界で維持することなのです。

5.「お金」がその役割を果たすために



お金は人々にとって「価値がある」と認められることが第一条件ですが、誰もが使いやすいということも大切です。

もし、お金が大きな石でできていたらどうでしょう。それが貴重な石だったとしても、買い物に行くたびに重たくて大きな石を運ばなければならず、大変な労力がかかります。

また、お金の単位が1万円しかなかったとしたらどうでしょう。おつりがありませんから、安いものを少しだけ買うということができなくなります。パンを買うときにも、食べきれないほどたくさんを買いななければならない、ということになります。

さらに、材質が変化してしまったらどうしますか。貯金箱に貯めたお金が溶けてしまうようでは、お金の価値を保存することができません。

みなさんがいつも使っているお金を考えてみましょう。お札は紙ですから、小さく軽くて使いやすくできています。硬貨は1円という小さい単位からあります。そして、紙や金属は材質が変化しにくいです。

つまり、今私たちが使っているお金は、持ち運びに便利で、分割可能性と耐久性に優れているという三つの条件を備えているのです。

6.「お金」を信じる？信じない？

「お金」を信じる？信じない？

単なる紙切れであるお札がお金として通用するためには、
みんなが価値があると信じてくれないけません

日本銀行の仕事は「お金」をみんなに
安心して使ってもらえるようにすること

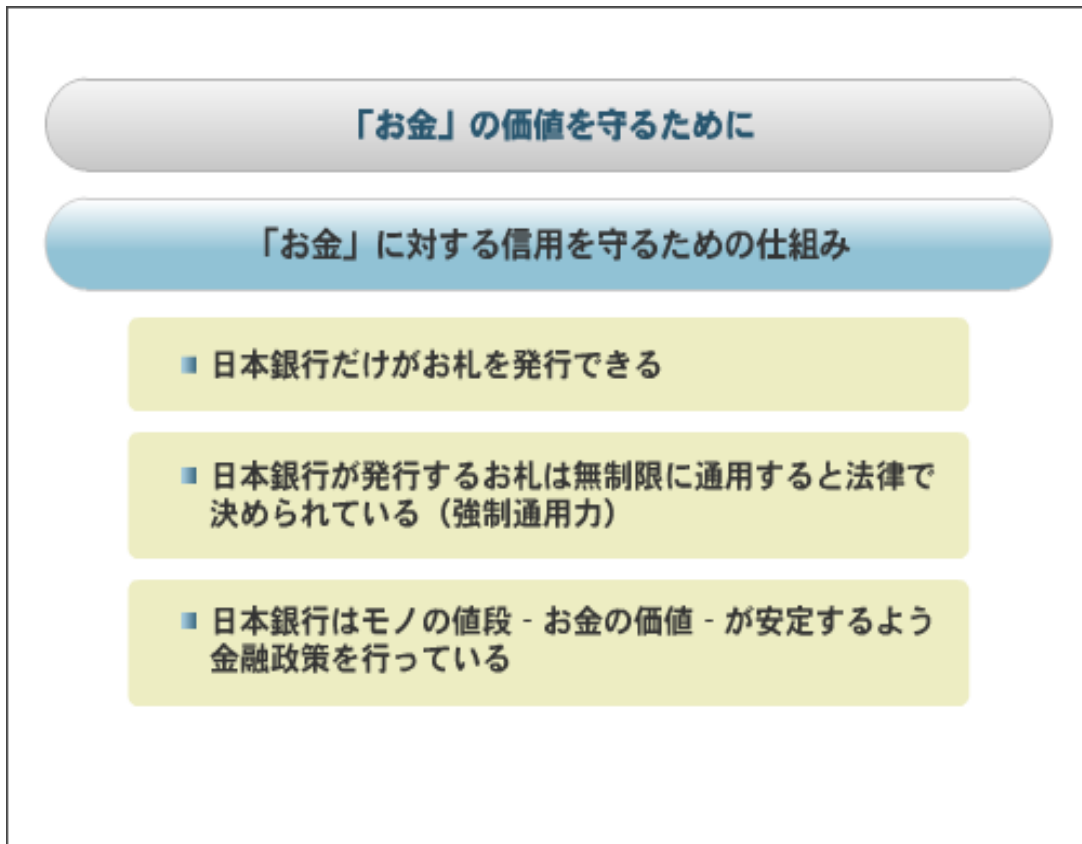
昔のお金は、イネや矢じり、金銀などでできていて、それ自体に価値がありました。現代のお金であるお札は、紙でできています。紙自体にはほとんど価値がないのに、額面どおりの価値があると世の中に認められているのはなぜでしょうか。

単なる紙切れにすぎないお札がお金として使えるのは、みんなが「お札には価値がある」と信用しているからです。もし人々が「日本のお札なんて信用できない」と思えば、その途端に日本のお札は使われなくなってしまいます。

そうすると、人々は「信用できるものは何だろう」と考えます。ほかの国のお金が信用できるということになれば、「では、そのお金で取引をしよう」ということになります。実際にそのようなことが起きた国もあります。日本のお金が信用されなくなれば、外国のお金にとって代わられたり、お金のない世界に戻ってしまったりする可能性も否定できないのです。

ですから、日本のお金の信用を維持し続けていくということがとても重要になってきます。一度信頼を失ってしまうと、回復するのはとても大変です。そのため、日本銀行は、みんなに安心して「お金」を使ってもらえるようにするための努力を重ねているのです。

7.「お金」の価値を守るために



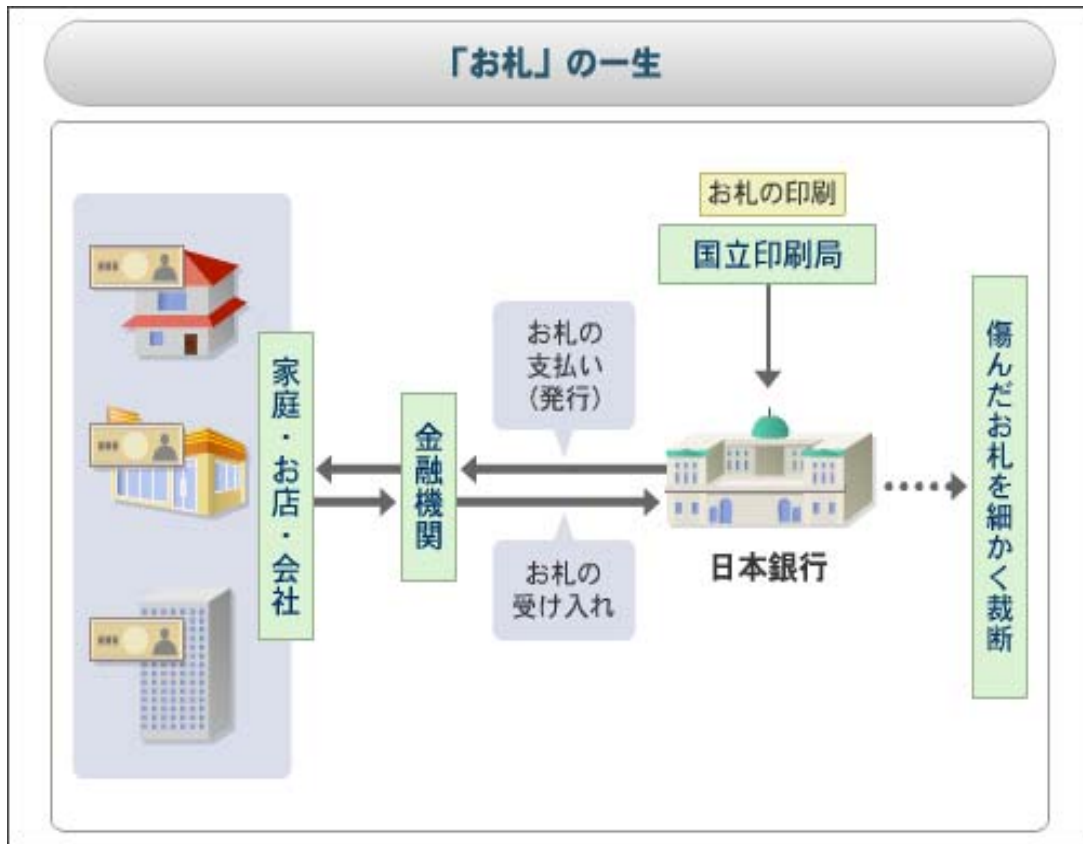
お金の信頼を守るためのしくみは、「日本銀行法」という法律によって定められています。

一つは、お札は日本銀行しか発行できないということです。誰でも好き勝手にお札を発行できるとしたら、お札の価値はなくなってしまいます。日本銀行が発行した「日本銀行券」だけがお札として認められるからこそ、お札はみんなに信用され価値を持ちます。もちろん、日本銀行は好き勝手にいくらでもお札を発行できるわけではありません。日本銀行が、お札を発行するためには、そのお札の裏づけとなる資産がなければなりませんし、実際に裏づけとなる資産をもっています。

もう一つは、日本銀行で発行するお札は、国内のどこでも通用し、無制限に使うことができるということです。お札は、印刷された額面どおりの価値であらゆる取引にいつでも使えるのです。「日本銀行券で支払います」と言ったとき、取引の相手は必ずそれを受け取らなければなりません。これをお札の強制通用力といい、この力があることでお金の交換機能が保証され、お札への信頼が生まれます。

これらのしくみに加えて、日本銀行が行う金融政策があります。これは、みんなが安心してお金を使うことができるように、モノの値段の安定のために日本銀行が行う政策のことです。こうして、お金の信頼は維持されていきます。

8.「お札」の一生



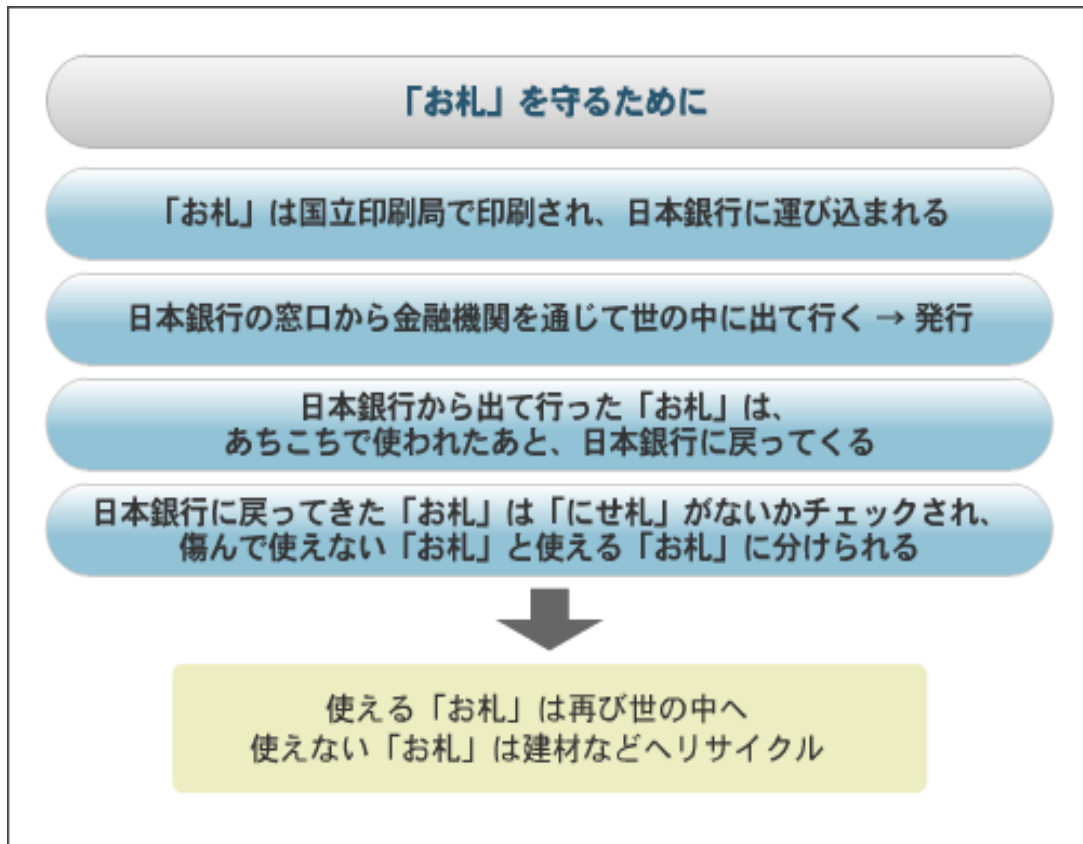
お札の一生を見てみましょう。お札を毎年何枚印刷するかは日本銀行が決めます。印刷は国立印刷局が行い、印刷されたお札は日本銀行の窓口から世の中に出て行きます。ただし、直接人々の手に渡るのではなく、民間の銀行などの金融機関を通して会社やお店、家庭に渡っていきます。

金融機関は、日本銀行に預金口座を持っていて、みなさんのお父さんやお母さんがしているように自分の口座にお金を預けたり、口座からお金をおろしたりしています。お金をいつ、どれだけ引き出すかは、日本銀行ではなく金融機関が決めます。金融機関は日本銀行に、欲しい量のお金を、欲しいときに取りにきます。そしてお札が日本銀行から金融機関に支払われた時点で、お札が発行されたことになります。

お札は、あちこちで使われた後、再び金融機関を通じて日本銀行に戻ってきます。このときも、いつ、いくら日本銀行にある自分の口座に戻すかを決めるのは金融機関自身です。日本銀行はお札の印刷枚数を決めることはできますが、実際のお金の出し入れについては金融機関が決めています。

こうして日本銀行に戻ってきたお札はすべて専用の機械にかけ、にせ札がないかどうかをチェックします。同時に、傷んで使えないお札とまだ使えるお札に分けて、使えるものは再び世の中に送り出し、使えないと判断したものは細かく裁断します。裁断された紙くずの一部は、建物の材料などにリサイクルされています。

9.「お札」を守るために



お札は、日本銀行から世に出て行き、再び日本銀行に戻った後、使えなくなったものはそこで一生を終えます。その流れを見ると次のようになります。

お札は日本銀行が印刷する枚数を決め、国立印刷局で印刷されます。印刷されたお札は、日本銀行に運び込まれ、金庫に保管されます。

そして、日本銀行の窓口から民間の銀行などの金融機関を通して、世の中に出て行きます。この支払いの時点がお札の発行です。

日本銀行から支払われたお札は、会社やお店、家庭などあちこちで使われ、また金融機関を通して日本銀行に戻ってきます。

日本銀行に戻ってきたお札は、にせ札がないかどうかを機械にかけてチェックします。同時に傷んで使えないお札とまだ使えるお札に分けられ、使えるお札は再び世の中に出されます。使えないお札は細かく裁断します。裁断された紙くずの一部は建材などにリサイクルされています。

10.「にせ札」の増加

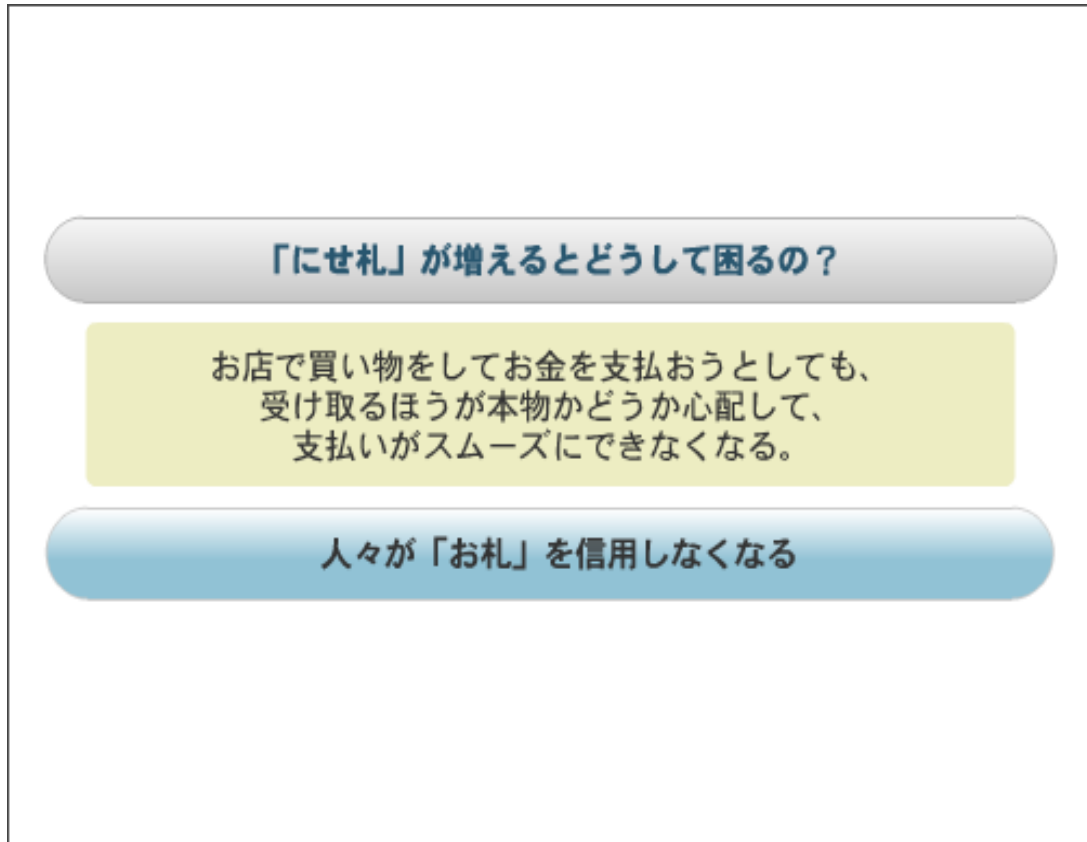


お札の中ににせものが混じっていると、お金の信頼を維持できなくなりますから、にせ札を1枚1枚チェックすることは、非常に重い責任を負った大切な仕事です。

日本はにせ札が少なく、その信用度は世界に誇れるものです。ところが、2002年から2004年に、にせ札は急増しました。1998年には807枚だったにせ札は、2004年には2万5千枚を超えています。わずか6年の間に、にせ札の枚数は30倍以上に増えてしまったのです。

ヨーロッパで使われているお札であるユーロと比較してみましょう。グラフからもわかるように、にせ札の枚数としてはユーロのほうが日本よりも圧倒的に多くなっています。確かに、枚数としては少ないのですが、増加率ではどうでしょう。日本では2002年に前年と比較して、にせ札が急増しました。にせ札が少なかった日本にとって、この急速な増加は大変ショックな出来事でした。

11.「にせ札」が増えるとどうして困るの？



にせ札が増えると、どうして困るのでしょうか。世の中に、にせ札があふれたらどうなるか考えてみましょう。

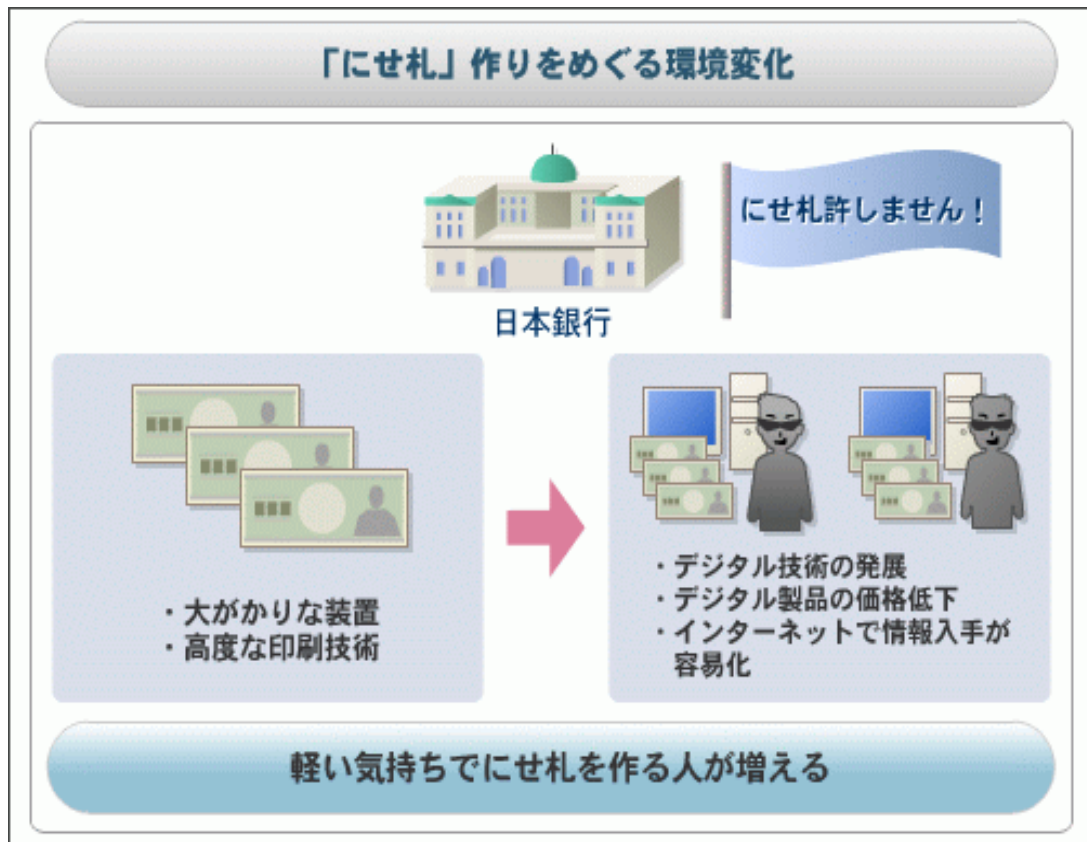
あなたが買い物をして、お札で支払おうとします。にせ札が増えてくると、お店の人は受け取ったお札が本物かどうか心配で、とても疑り深くなります。あなたが渡したお札の裏表を、1枚ずつじっくりながめ、透かして見たり、触ってみたりと受け取るまでとても時間がかかることでしょう。お店の人が「これはにせ札かもしれない」と判断すれば、そのお札は受け取ってもらえません。何枚かのお札のうち受け取ってもらえないのが1枚だったとしても、金額が足りず、あなたは欲しいものが買えなくなるかもしれません。

こんなことが続けば、支払う方も「このお札は本物だろうか」と不安になり、安心してお札が使えなくなってしまうです。

お札は、みんなが信用しているから価値があります。信用がなければ、ただの紙に過ぎません。にせ札が増え、お札に対する信頼が低くなれば、買い物さえもスムーズに行かず、社会が混乱することになってしまいます。

世の中ににせ札が増え、人々がお札を信用なくなってしまうと大変な事態を招きます。だから、にせ札が増えると困るのです。

12. 「にせ札」作りをめぐる環境変化



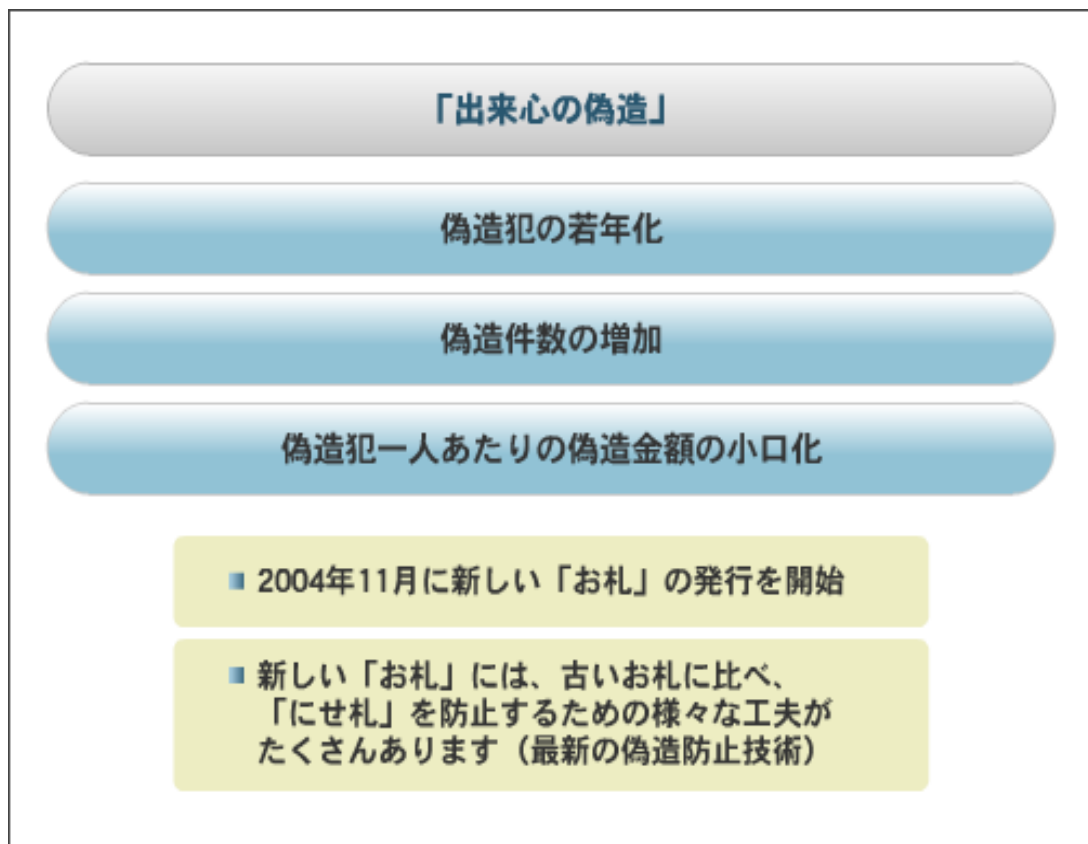
日本銀行では、にせ札を増やさないために、にせ札をチェックする機械の精度を高めたり、にせ札防止のための広報活動に力を入れるなどしています。というのも、にせ札を作るための環境が、技術革新によってここ10年ほどで大きく変わってしまったからです。

かつては、にせ札作りはプロの仕業でした。お札は、大がかりな装置や高度な印刷技術を使って印刷されています。ふつうの人はそのような印刷機や技術は持っていませんし、にせ札作りのプロは大型の印刷機を使って大量の印刷をしないと、元が取れないということになります。

ところが、今はパソコンなどのデジタル技術が発展し、製品の価格も下がって、ふつうの人でも手に入れられるようになりました。プリンタやカラーコピー機も高性能化しています。さらに、インターネットが普及し、さまざまな情報が簡単に入手できるようになりました。

そのため、軽い気持ちでにせ札を作ってしまう「出来心の偽造」が増えているのです。技術革新がもたらした環境変化のなかで、にせ札は私たちにとって遠い世界の話ではなくなった、ということが言えるでしょう。

13.「出来心の偽造」



パソコンなどのデジタル技術を使って、軽い気持ちでにせ札を作ってしまう「出来心の偽造」には三つの特徴があります。

一つめは、偽造の犯人が10代や20代など若年化しているということです。

二つめは、偽造の件数が増えていること。三つめは、偽造犯一人当たりが作るにせ札の金額が少ないということです。技術の進歩によって、昔より手軽ににせ札ができてしまうため、出来心で作ってしまう人が多いのです。

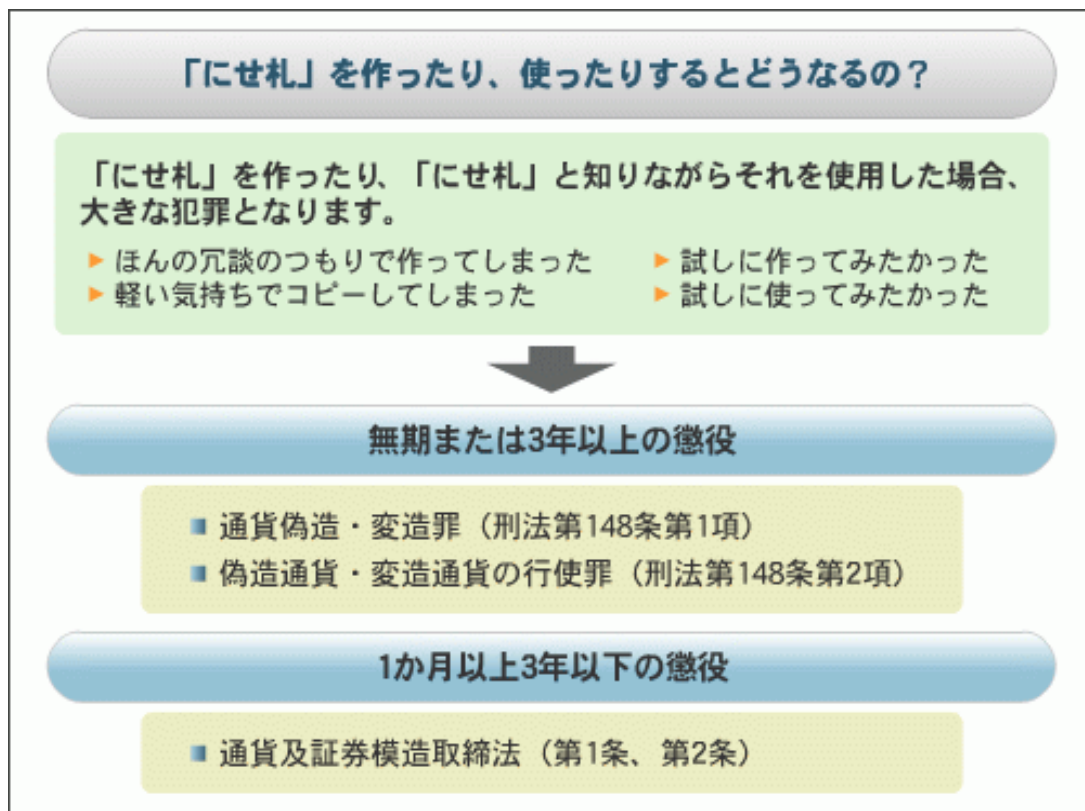
日本銀行では、このような事態に対処するため、2004年11月に新しいお札の発行を開始しました。新しいお札には、これまでの透かしや超細密の画線、特殊発光インキなどに加えて、さまざまな偽造防止のための技術が施されています。

例えば、

- (1)角度を変えると画像の色や模様が変化して見えるホログラム
- (2)光にすかすと線が見えるすき入れバーパターン
- (3)傾けると文字が浮かびあがる潜像模様

など、いくつもの新しい技術を採用して、パソコンやコピー機では偽造できない工夫をしています。この結果、新しいお札の偽造は少なくなっています。

14.「にせ札」を作ったり、使ったりするとどうなるの？



にせ札を作ったり、にせ札と知りながら使うと法律によって罰せられます。にせ札を作ったり、使ったりすることは犯罪なのです。刑法の第148条第1項では「通貨偽造・変造罪」と言ってにせ札を作ることが、同じく第2項では「偽造通貨・変造通貨の行使罪」と言ってにせ札を使うことが禁じられていて、いずれも無期または3年以上の懲役という非常に重い罪になります。

「試しに1枚だけ作って、使わずにすぐに捨てればいいたろう」という気持ちも禁物です。通貨及証券模造取締法により、にせ札は使わなくても、作っただけで犯罪になります。

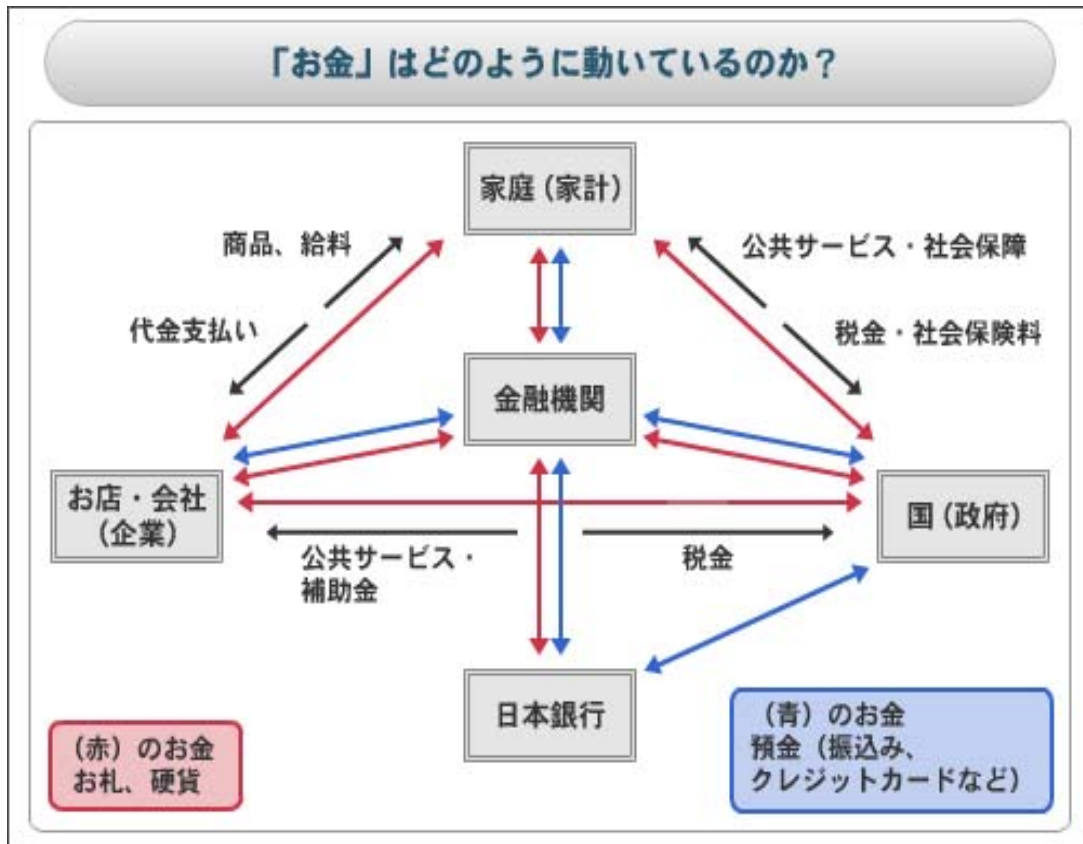
例えば次のような言い訳も通用しません。

- ・ほんの冗談のつもりで作ってしまった。
- ・軽い気持ちでコピーしてしまった。
- ・試しに作ってみたかった。
- ・試しに使ってみたかった。

軽い気持ちが一生を台無しにする重大な事態につながってしまうのです。

にせ札を作ったり、にせ札を使ったりしないのは、もちろん自分自身のためです。そして、日本のお金の価値を維持するためにもとても大切なことです。軽い気持ち＝「出来心」で、自分の身ににせ札を近づけることのないよう、心がけていきましょう。

15.「お金」はどのように動いているのか？



日本銀行から金融機関を通して世の中に出たお金はどう動いていくのでしょうか。

金融機関のお金は、家計やお店・企業によって引き出されます。家計や企業がたくさんお金を必要とすると、金融機関はお金が足りなくなり、日本銀行から引き出します。反対に、家計や企業が金融機関にたくさんお金を預けると、金融機関はお金が余るので日本銀行に預けます。つまり、日本銀行のお金の出入りは世の中の経済活動に大きく左右されています。

家計と企業の間を見ると、家計は企業に労働を提供し、給料という形で企業が家計に流れます。家計から企業には、商品やサービスを買うという形で金が流れます。

家計と企業と国(つまり政府)の間を見ると、税金や社会保険料などを家計や企業が政府に支払うと、金は家計や企業から政府に流れます。反対に政府は家計や企業に公共サービスを提供します。公共サービスは学校や道路や橋といった公共施設などですから、金の形では流れません。また、政府から家計には年金などの形で金が流れることがあります。

金を見るときに注意したいのは、金はお札で動くとは限らないということです。給料は、銀行振込みが多いですね。買い物も、クレジットカードを使えば、代金はお金で払わず銀行などの口座から引き落とされます。現実の経済では、金の流れはお札だけでなく、金融機関の預金口座を通して動くことが多いのです。

金の動きを見るためには、赤で示したお札や硬貨のほかに、青で示した振込みやクレジットカードなど預金の流れも見なくてはなりません。金を安心して使えるようにするためには、お札だけでなく金融機関の預金を含めた金の流れを円滑にしなければならないのです。